

9 長崎の人々に捧げた生涯・ド・ロ神父

貴族の家に生まれたマルク・マリー・ド・ロ（1840-1914）は、開国後の明治時代に日本で生活した外国人の一人で、1868年にパリ外国宣教会の神父として来日し、1878年に長崎の中心部から約30kmほど離れた外海（そとめ）地区にある出津（しつ）教会に赴きました。



Marc Marie DE ROTZ

外海地区には、キリスト教の信者が多く暮らしていました¹。この地域はとても貧しく、孤児や捨て子、海難事故や病気で働き手を失った女性が多くいることにド・ロ神父は心を痛めました。そこで、私財を投じて、孤児院や救助院を設立しました。救助院とは女性のための授産施設で、ド・ロ神父の技術指導によって、織物、素麺、マカロニやパン等を製造し、長崎の中心部に暮らすヨーロッパ人に販売して収入を得ました。ド・ロ神父は、フランスで身につけた農業、印刷、医療、土木、建築、工業、養蚕業など様々な技術を惜しみなく伝えました。地元の人々から「ド・ロさま」と呼ばれて親しまれ、外海の人々に生涯を捧げました。

ド・ロ神父が伝えた製麺技術は、一度は廃れたものの2008年に復活し、現在は「ド・ロさまそうめん」として販売されています。外海地区の出津集落は、2018年にユネスコ世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の一つに指定されています。また、外海のキリシタン弾圧を題材にしたのが、遠藤周作による小説「沈黙」（仏語タイトルは” Silence”）です。この作品は、1971年に篠田正浩監督によって、また2016年にはマーティン・スコセッシ監督によって映画化されました。

1978年、旧外海町とノルマンディーにあるド・ロ神父の出身地であるヴォー・シュール・オール市（Vaux-sur-Aure）は、姉妹都市提携をしました。2005年に旧外海町は長崎市に組み込まれたことから、現在は45万人近い人口を擁する長崎市とわずか350人余りの人が暮らすヴォー＝シュール＝オール市が姉妹都市となっています。

掲載日：2021年10月29日

¹ キリスト教が弾圧されていた江戸時代に密かに信仰を守っていた「隠れキリシタン」の多くは、1865年のプチジャン神父による「信徒発見」以降にカトリックに復帰したとされているが、中にはカトリックとは異なる「隠れキリシタン」独自の信仰を維持した者もいた。